GP特集：書評１

『今を生きる子どもと家族』

二村克行、薮本知二、山本佳代子［共著］（ふくろう出版、2009）

坪　郷　　康

『今を生きる子どもと家族』の著書を二村准教授より戴いて、一週間後、その折りに「イラストや内容が学生達に理解し易くいいですね」とお礼の言葉が、この書評をという事になったのであろう。この書評を担う任ではないことを冒頭にお断りしておきたい。

私は臨床心理学を学び、児童相談所、児童福祉施設等で心理判定員として児童福祉の支援に携わってきた。当初は児童の親たちの「今」の支援であったが、次第に大人になったときどのように生きていくのか「将来」の支援の大事さに気づくようになり、より親への支援を大事にしてきた。このようになると当時の臨床心理学では、支援のあり方の模索は十分な支えにはならない事となり、社会福祉学会で学ぶことを選択して30数年を経過している。社会福祉の場で子どもの「将来」の支援の在り方を模索している者の一人である。

また、経験から新しい家族援助論など福祉に関する講義も担当しているので専門外ともいえない。

さらに、共に学ぶ学生のテキストの選択は、常に大きい課題となる。私の冒頭の評価はこの背景のもとにある。

「はじめに」書かれている第１章は家族・親・大人の概念を理論的に考察し、それぞれに何が必要で欠けているものを明らかにする。第２章では子どもや家族を取り巻く状況をわかり易く解説する。第３章は夫婦や親子の法律関係を明解・簡潔に説明すると述べられておられ、その意図は十分に満たされている。

第２章では滝井宏臣『子どもたちのライフハザード』、正木健雄『データが語る子どもの体心の危機』をベースに現代の子どもたちの今を俯瞰し、更に子ども・家族を取り巻く状況に触れ、現代の児童福祉の課題を浮き上がらせ、さらに実践的な対処のあり方をコンパクトに感銘に展開されていて、イラストも適切である。さらに、児童福祉の歴史に今少し比重があればという期待はしすぎであろうか。

第３章はイラストも文章も家族法の理解を深めるためのテキストとして役割を十分に果たすものであろう。

第１章の家族とは何か、親とは何かについては、第２章、第３章と比較すれば専門性の高いもので理解することに易と難の言葉をかりれば少し難という言葉が浮かぶ。

また、共に学ぶ学生に指導する側の理論は個性的なものであることを決して否定するものではないが、このテキストになじむ学生にとっては個性的理論であるよりは、より普遍的理論が望ましいのではないかと思う。この点では、家族力動の人格発達や大人になること、自己愛性人格等の展開は普遍的理論というよりも個性的理論のように私には思える。

また、個人的な偏りのあるコメントでもあるが、フロイドのいうエディプスコンプレックスは女性学の人々から痛烈な批判があり、理論的に翳りをもたらしている。

先進国では、フロイドの理論は過去の理論であるとされている。しかし、わが国では現在の理論である。精神分析的理論に基礎を置く研究者や実践者は少なくない。また、精神分析に関する書物は書店でも大きな空間をしめている。著書のスキ

ンシップやエディプスコンプレックス等のことばは現在の理論としてでなく、過去の理論として位置ずけて欲しい。看護学等の関係領域でも数年前からこの立場を踏襲している。

私は家族福祉より老人の福祉の問題も取り入れて、家庭福祉としての東洋型の福祉の展開を期待している。（山口県立大学名誉教授）

リプライ

坪郷康名誉教授からの書評に答えて

二　村　克　行

坪郷先生、ご丁重な書評をありがとうございます。お忙しい中、私ども３人の分担による『今を生きる子どもと家族』（ふくろう出版、2009）をお読みいただいたばかりか、丁寧なコメントをいただき恐縮です。第２章と第３章に関しては、肯定的な評価をしていただき、執筆された先生もかなりわが意を得た思いでおられると存じます。また、私が分担いたしました第1章について一番多くを割いてご批評をしていただき光栄に存じます。順にお答えしていこうと思います。

まず、「個性的理論」か、「普遍的理論」かとのご指摘ですが、この分類は少々荒いというか、分け方が正確でないような気がいたします。「一般性」（generality）または「普遍性」（universality）か、「特殊性」または「専門性」（specialty）という分け方が学問的ではないかと思います。前者は、人間の人格発達一般に当てはまる理論に形容される使用方法で、後者は、ある種の人間、またはある条件下において成立する人格発達の理論に形容される使用方法ということになりますでしょうか。私の執筆でいえば、第4の「家族力動の人格発達」が、「一般的・普遍的」理論となり、第5の「大人にあることと自己愛性人格」の「１）自己愛世代の誕生」の部分が「特殊的・専門的」理論となります。第４の「家族力動の人格発達」で「一般的・普遍的」理論を説明し、第５の「大人にあることと自己愛性人格」の「１）自己愛世代の誕生」の部分で、「特殊的・専門的」事例のなかで、最も多くみられる自己愛人格を代表的に取り上げて説明させていただいたわけであります。家族力動の人格理論を「特殊的・専門的」理論と位置付けてしまうと、その他の人格理論も「特殊的・専門的」理論となってしまって、先生が求めておられる「一般的・普遍的」理論が存在しなくなってしまいます。

次に、精神分析に関するご指摘であります。先生は、フロイドの精神分析理論・技法とエディプス・コンプレックスの概念と、精神分析理論の流れを混同して論じられているようです。精神分析理論は、フロイドの理論を嚆矢としておりますが、その後の理論の進展は目覚ましいものがあり、愛着と対象喪失を研究し『母子関係の理論』をまとめたＪ.ボウルビィ、乳幼児と母親との二者関係を重視したメラニー・クライン、さらに「母子関係論」を進展させたウィニコットなど、エディプス・コンプレックスを核とした父母子の三者関係からその前期に研究の焦点が移り、渡辺久子の『母子臨床と世代間伝達』(2000)の研究が示すように、母親の生育歴とその母親の子育ての関係が研究テーマとなっております。さらに、アメリカでは、「自己愛」の構造を研究したコフート、自己感の発達を研究しているＤ．スターン（1934-）や自己の情動的中核と情緒応答性を研究したＲ．エムディ（1935-)、『間主観的アプローチ』（1987）を

著したロバート・D．ストロロウ（1942-）など精神分析学の隆盛は一向に衰える兆しを見せません。

第３は、フロイドの理論・技法とフェミニズムについてです。ご承知のようにフロイドの精神分析は19世紀の性道徳が厳格な気風と当時のパターナリズムを基盤として打ち立てられたものでした。２～３歳以降のエディプス期の父母子の３者関係の分析は19世紀当時の家族観に基づいていました。さらに、フロイドは意図的にか、母子関係の分析を回避していました。このことが後の研究者の非難の的となりました。母子関係の重要性を指摘したのは、日本の古澤平作のアジャセ・コンプレックスの研究でした。古澤の研究はその後の母子関係の研究の先駆けとなったといえます。フェミニズムには、性差別の起源を経済的なものに求めた社会主義派フェミニスト、その起源を生物的なものに求めた過激派フェミニスト、そしてその起源を心理的なものに求めた穏健派フェミニスト等がありますが、その共通点は「家族が女性を抑圧している」と主張したことにありましょう。特に、フロイド理論の家父長的な記述がフェミニズムの非難の対象となったことはご指摘の通りです。しかし、フェミニズムの側にも問題点がありました。男性に対する女性の権利・平等を主張するあまり、子どもの視点から家族や親の問題を論じることを閑却してしまいました。このことをフェミニズムの中心人物であり『新しい女性の創造』（1964、邦訳は1970）を著したBetty Friedanも気がついたようで、1981年に『セカンド・ステージー新しい家族の創造』（1981）を書いております。フェミニズムのもう一つの問題点は、親の役割、特に、「父性」の役割を否定して「父性」は「歴史的・社会的産物」だと決め付けたことにあります。この論点は、思わぬ学問領域から論破されるに至りました。それは、動物行動学からでした。霊長類、とくにゴリラを研究している山極寿一らの研究（「家族起源論へ向けて―ゴリラモデルの検証」1984）によって、霊長類にも「父性（的行動）」がみられることが明らかにされました（山極寿一『家族の起源　父性の登場』1994）。「理論にかげり」を見せているのはむしろフェミニズムの方と言えないでしょうか。

第４の問題点は、「家族力動論」についてです。先生は、「精神分析」ないし「精神力動」と「家族力動」とをごっちゃにしておられるような気がいたします。「家族力動」論は、フロイドの精神分析を参考にしているとはいえ、それとは異なる理論です。1950年代以降に、アッカーマン、ボウエン、ミニューチンなどがそれぞれ独自に研究発展させてきた理論です。ネーミングは、「家族力動」（Family Dynamics）から「家族療法」（Family Therapy）、そして「家族システム論」(The System Theory of the family)とシフトしてきております。

誤解を恐れず簡単にいえば、「精神力動」が池（心）に映った月（家族の表象）を対象にしているのに対して、「家族力動」は、現実の関係性の力学を実際に観察して、介入することにあります。現実の月と地球の引力関係の観察と例えることができましょう。わが国では、東京大学の亀口健治氏や精神科医でもある斉藤学氏らが先駆的研究者といえるでしょう。

第５に、皮膚感覚の再評価と母子密着（close-contact）についてです。スキンシップ（和製語）の用語法はともかくとして、母子関係の重要性については、ホールディングよる皮膚接触の研究から、アイコンタクトや語りかけといったverbal、non-verbalなコミュニケーションの重要性を明らかにする研究に焦点が移行して（その意味で母子密着（close-contact）の肯定的・否定的研究が進んでいる）いるようですが、最近年の研究には皮膚感覚の再評価がなされるようになっています。山口創氏の『愛撫・人の心に触れる力』（NHKブックス、2003）『皮膚感覚の不思議』（光文社新書、2004）『子どもの「脳」は肌にある』（Blue Backs、2006）、てん（人偏に専）田光洋氏の『賢い皮膚―思考する最大の<臓器>』（ちくま新書、2009）などがそうです。

フロイドのエディプス・コンプレックスの概念やユングの「父性・母性」の概念をこのテキスト

で初学者向けに説明したことで、先生に無用の混乱を与えてしまった責任は筆者にありますが、これらの概念は、今日の精神科医の入門書でも説明の前提として常識として織り込まれております。例えば、精神科医で大学の教授でもある香山リカ氏の『親という病』（講談社現代新書、2008）、精神科医の斉藤環『母は娘の人生を支配する　なぜ「母殺し」は難しいのか』（NHKブックス、2008）のなかでもエディプス・コンプレックスを基点として親子の病理を説明する箇所があります。

「先進国では、フロイドの理論は過去の理論とされている」とは、すこし筆が滑ったのではないでしょうか。医学分野でも、エビデンス重視の実証主義や、薬物医療重視に対して反省が見られるようになりました。さしあたり、清田友則氏の『高校生のための精神分析入門』（ちくま新書、2008）をお読みいただくようお薦めいたします。この本は、高校生向けというより、むしろ社会人向けに現代の家族病理を易しく分析してくれている良書です。筆力のない私の著書と異なり、最後まで飽きさせない展開を見せてくれます。私も次回からもう少し分かり易い記述を心がけたいと存じます。

最後に、私の恩師山根常男は、「児童福祉ないし子ども期に関する家族の問題は、老人福祉の問題でもある」と申しております。その意味で、家族福祉は老人福祉を含んでいます。認知症のお年寄りが過去の家族問題を抱えて生活していることは近年指摘されてきたところです。先生の「東洋型」福祉の展開で、老人の家族問題にも光が当たればよいとこの点では私も賛意を表します。

坪郷先生とは今後も有意義な学問討論をしていきたいと願っております。よろしくご指導ください。先生のご健勝を衷心から祈念いたしております。ありがとうございました。

参考文献

メラニー・クライン（1983）『メラニー・クライン著作集１　子どもの心理発達』（誠信書房）

D.W.ウィニコット（1984）『子どもと家庭　その発達と病理』（誠信書房）

渡辺久子（2000）『母子臨床と世代間伝達』（金剛出版）

R.D.ストロロウほか（1995）『間主観的アプローチ　コフートの自己心理学を超えて』（岩崎学術出版社）

Ｊ.ボウルビィ（1976）『母子関係の理論　Ｉ　愛着行動』（岩崎学術出版社）

ハインツ・コフート（1995）『自己の修復』（みすず出版）

ハインツ・コフート（1995）『自己の治癒』（みすず出版）

ハインツ・コフート（1994）『自己の分析』（みすず出版）

D.N.スターン（2000）『親―乳幼児心理療法』（岩崎学術出版社）

ベティ・フリーダン（2004）『新しい女性の創造』（大和書房）

山極寿一（1994）『家族の起源　父性の登場』（東京大学出版会）

山極寿一（2008）『人類進化論　霊長類学からの展開』（裳華房）

サルヴァドール・ミニューチン著・山根常男監訳（1984）『家族と家族療法』（誠信書房）

マイケル・カー・マレー・ボーエン（2001）『家族評価　ボーエンによる家族探求の旅』（金剛出版）

鈴木浩二監修（1991）『家族に学ぶ家族療法　研修・実践・展開』（金剛出版）

亀口憲治（2004）『家族力の根拠』（ナカニシヤ出版）

斉藤学（2008）『「家族神話」があなたをしばる　元気になるための家族療法』

山口創（2003）『愛撫・人の心に触れる力』（NHKブックス）

山口創（2004）『皮膚感覚の不思議』（光文社新書）

山口創（2006）『子どもの「脳」は肌にある』（Blue Backs）

てん（人偏に専）田光洋（2009）『賢い皮膚―思考する最大の<臓器>』（ちくま新書）

香山リカ（2008）『親という病』（講談社現代新書）
斉藤環（2008）『母は娘の人生を支配する　なぜ「母殺し」は難しいのか』（NHKブックス）
清田友則（2008）『高校生のための精神分析入門』（ちくま新書）
山根常男（1998）『家族と社会　社会生態学の理論を目指して』（家政教育社）